中央が東大使、その右がフィゲレイド伯大使夫妻

　５日目の９月２１日、アヴェイロを経てリスボンに帰着。夜は日本国大使公邸で交流夕食会。明日はもうブラジルに帰国なので、最後の晩だ。

　午後７時から交流セレモニーが始まり、東（あずま）博史駐ポルトガル日本国大使は「私が赴任した時、日本からの観光客は年間６万人だったが、去年は１２万人と倍増した。今回は５７人もブラジルから来てくれた。来年はブラジル日本移民１１０周年、こちらも日本ポルトガル交流４７５周年なので、三国間のさらなる関係強化、交流が活性化を図りたい」と挨拶した。

　県連の山田康夫会長は「ポルトガルは初めてだが、町が美しい、治安が良い、気候が良い。ブラジルに永住したのが間違いだったかも」と会場から爆笑を誘い、大使に歓迎会の配慮を感謝した。谷口ジョゼ県連副会長も「兄弟国でありながら、来たことなかった。とても良い機会となった」と挨拶した。

　駐ポルトガルブラジル大使ルイス・アルベルト・フィゲレイド氏も「日系人はブラジルの未来に強い影響力を持つコミュニティ。それをポルトガルで受け入れられて幸せ」と日系妻マリア・アンジェラ・イケダさんを紹介し乾杯の音頭をとった。この大使夫妻の存在自体が、深い３国関係を体現している。（つづく、深沢正雪記者）